胡傑監督『星火』初探

土屋 昌明

2015年3月12日と13日に、本研究所のグループ研究「方法としてのドキュメンタリーの生成とアジアにおける発展」が、胡傑監督のドキュメンタリー『星火』の上映・討論をおこなった。本稿はそれをふまえて、この作品に対して初步的な探索を加える。

胡傑監督は1958年4月生まれ、山東の人である。現在まで50篇ほどのドキュメンタリーを作っているが、そのすべてが中国当局の映画検閲を受けていないインディペンデント映画（中国語「独立电影」）である。『星火』は2013年の制作で、2014年8月に北京の東方映画基金の第11回北京インディペンデント映画祭（中国語「第十一屆北京獨立影像展」）で初上映が計画されていた。日本の新聞でも報道されたように、この映画祭は当局によって中止においもれた。この映画祭のトリで上映予定されていたのが本映画である。その後、同映画祭の審査員は、2014年12月31日に胡傑監督『星火』に対して「独立精神賞」を出した（審査員は郭力炘・呉文光・楊嘉鈞）。おそらく中国ではまだ公開上映されていないが、一部の愛好者の間では鑑賞されているらしく、インターネット上には感想や意見が出ている。また、インターネット上の掲出によると、2014年4月3日に香港中文大学で、10月12・16・19日に台北の第九回「台湾国際影片選展」で上映されたようである。台湾ではアジア映画フェスティバルコンペ優等賞（中国語「亞洲銀像競賽優等賞」）・華人ドキュメンタリー賞審査委員特別賞（中国語「華人紀錄片獎評審團特別獎」）をとっている。また、パリの現代中国研究センター（Centre d'études français sur la Chine contemporaine）主催による討論会「毛泽东時期の民間記憶とその歴史的衝撃」（Popular Memory of the Mao Era and its Impact on History）でも2014年12月15日に上映された。その後、ベルリンなどでも上映され、好評を博したようである。日本では、本研究所グループ研究の上映が初であった。

本作は、1960年中日戦争中日間で発生した、知識人も反体制地下活動に対する政府の弾圧事件を扱ったドキュメンタリーである。作中のインタビューによれば、この事件に関与した人物は200人以上のいわれ、40名あまりが罪と問われた。中心人物の張春元は無期懲役の判決のあと死刑に、もう一人の杜映霞は懲役5年のあと死刑になった。この事件は中国でタブー視されているらしく、関係の資料や本格的な研究はあまり公開されてこなかった。日本の中中国現代史研究でとても注意されていないようである。

1 鍾錦輝『毛泽东与中国』第6章で林昭について、また第7章でこの事件について詳しく論じている。阿部幹雄ほか著、青土社、2012年、上巻414頁以下。
歴史事件を映像によって検討した映像歴史学の作品として本作をみた場合、その基本的な重要性は次の三点であろう。第一に、インタビューに答える登場人物の多くが、この事件の当事者であり、このインタビューそのものが貴重な歴史証言となっていること。第二に、事件の起こった現地を直接撮影しており、この事件の現場環境を理解させる映像ともなっていること。第三に、画面に映し出される地下刊行物「星火」の映像およびその文章は、従来、存在すら知られていなかったものであり、非常に貴重な資料であること。以下、紙面の関係で、このうち第一点と第三点をふまえて、胡傑監督の作品に描かれている「星火事件」の特徴について論述したい。

星火事件の意義

本作にもとづいて、「星火」という地下刊行物出版に関する事件（「星火事件」）を検討しておこう。

1956年4月25日、毛沢東は中国共産党中央政治局擴大会議で「百花斎放、百家争鳴」の方針を打ち出し、大衆が共産党に対して意見・批判を出す「大鸣大会」をよびかけた。これに答える形で、全国で共産党中央に対する意見が出された。これらに対して毛沢東は、1957年6月に「力を結集して右派分子の侵攻に反撃することに関する指示」を党内に伝達し、『人民日報』に社説「これからどうなるか？」（毛沢東が執筆）を発表した。これを境に、共産党へ意見・批判を出していた者を「右派分子」として摘発し、大衆による批判大会を開いて打ちのめした。

本作に登場する人物はみな、この時に「右派分子」として批判され、農村に下放させられた者である。彼らの多くが甘粛省の慶州大学の教員や学生であった。その後、農村では大飢饉が進行し、多くの餓死者が出た。彼らはこの状況を目の当たりにし、意見交換のために現状認識について書いた論文を執筆し、それを「星火」という名の印刷物として刊行した。これは、現代の日本で言えば「研究会」であり、「会誌」であるが、任意団体の設置と自主印刷物の刊行配布が認められていない当時の中国では、反体制的な地下組織と地下出版物に他ならず、関係者は逮捕・懲役刑となった。以上の事情を軸に、本作にみえる他の関連事項を加えて時系列に整理すると、次のようになる。

1956年4月25日 毛沢東が「百花斎放・百家争鳴」を指示。

「星火」という誌名は、毛沢東が1930年1月5日に林彪元帥に出した「時局仮定和紅軍行動問題」において、農村から都市を包囲する戦法を説いたときに、「星火之火、可以燎原」という言葉を使ったもののもとづく。小さな火が広まって広野を焼き尽くすように、遠方の火の手が広がって革命になるという意。張春元らは、毛沢東の言葉を自分たちの刊行物の名称にして共産党批判をした点に注意すべきであろう。
1957年2月27日 毛沢東「人民内部の矛盾を正しく処理する問題について」。
1957年5月1日 中共中央「整風運動に関する指示」が『人民日報』に登載。
1957年5月19日 北京大学で学生の民主化運動、雑誌『廣場』を発刊。
1957年6月8日 毛沢東「力を結集して右派分子の気をがいじまった攻撃に反撃を加えよう」、
反右派運動。
この後、蘭州大学の教員と学生が批判されて農村に下放される。
1958年5月5～23日 中共第8回党大会第2回全議、大躍進を肯定、毛沢東が社会主義総路線を提示、10月までに人民公社化が全国で実現（「三面红旗」）。
1959年5月 張春元・顧雁・胡曉應・孫和が天水の馬跑泉公社で地下組織の結成を相談、
農民暴動あるいは政変の惹起の可能性を話し合う。顧雁が刊行物『星火』を
提案。
1959年10月 向承鑒が華北に出張、各地で餓死者を目撃、記録し、議論。
1960年1月 『星火』第1号が出来。
1960年2月 鄭得鈞が四川の餓死者の悲惨な状況を星火メンバーに知らせる。
1960年3月 このころ武山県だけで1万人以上の餓死者がおり、杜映華らが認識。
1960年4月 張春元・苗慶久が上海南匯区発電公社黒橋の顧雁のところに集まり、『星火』を
中共中央指導部に発送することを計画。また張春元の「論人民公社」が出
来したら、印刷して全国の公社書記以上の幹部に配布することを計画。
1960年8月 張春元は向承鑒に電話し、暗号でメンバーの検挙が始まったことを伝える。
1960年9月30日 向承鑒・杜映華ら武山のメンバーが一斉検挙される。
1961年9月6日 張春元が逮捕される。

彼らがどのようなプロセスで右派とされたか、蘭州大学の状況について、本作では取り上げ
ていない。この点について、本作の外部の資料を少し見ておこう。
注意すべき人物として、彼らを統括する立場にある蘭州大学の副学長だった陳偉時がいる。
彼は、文革にされた理工大学に留学して帰国した者で、相当に激しく右派批判をしていた
ようである。共産党の資料によれば、彼は1957年5月に「高等教育がわからない人間に高
等教育学校（大学）をやられて、どうして学校をうまくやれるだろうか? こういう状況なら、
高等教育学校の党員間を取り消すべきだ」と意見している3。このため、反右派闘争が始まる

3『高等学校右派言論論述』中国中央人民大学委員会、1958年8月（宋長敏編『中国反右運動歴史』
香港中文大学中国研究服務中心、2010年）。

- 8 -
と厳しく批判され、甘粛の果てにある辺境溝の農場で労働教養の処分を受けた。彼と「星火」のメンバーとの関わりは不詳であるが、立場的に影響力が強かったと想定される。また、「星火」の主要メンバーの一人、胡曉進は化学の専攻で蘭州大学の教員をしていたのであり、胡曉進は向承鎧の先生であった。

この他、メディアにおいては、蘭州の主要新聞である『甘粛日報』で、幹部を批判する雑文が発表されていた5。例えば『甘粛日報』記者の王景超の雑文がそうである。王景超は反右派で批判され、陳儀時と同じく辺境溝に遣わされた後、そこで死亡した。このような共産党批判の高潮があった中、本作の登場人物らも右派とされ農村に遣わされたのである。

本作からうかがえる同時代へのまなざしと「星火事件」

しかし、「星火事件」の主要メンバーの一人である向承鎧へのインタビューによれば、彼は出張で北京ほかの都市の地で途中下車ことができ、居住していた工場には管理者はいなかったという。同じく主要メンバーの一人である譚輝雪は、本作と一連のインタビューで、「農村の現状を見て自分たちは真の右派になった」と述べている6。つまり、右派分子に認定されたのは、徴罪あるいは罷免だったという認識である。また、向承鎧によれば、農村の自室には果物いっぱいに書物を持参したという。このように本作では、彼らの右派認定の詳細はわからないものの、それは彼らの人生を自暴自棄させるほど深刻な性質ではなかったことに。したがって右派にされたことが「星火事件」の直接の要因ではなかったことが示されているのである。

この事件の直接の動因は、当時の農村で蔓延していた大飢饉に対する危機意識であった。この大飢餓が我々の想像を絶するほど悲惨なものであったことは、1980年代になって人口統計が公表されたことで初めて世界に知られたのであった。譚輝雪は、星火のメンバーの大飢餓の認識について詳しく採り上げている。それにれば、彼らの認識は次のように深まっていったようである。

まず、死者が出るのは病気ではなく飢死が原因である。それは大飢餓の目標を達成するために、人民公社の食糧が少なくなかったためである。譚輝雪は次のように述べている。

---

4 高爾泰『尋找家園』広州、花城出版社、2004年。高爾泰も辺境溝での労働経験がある。
5 和輝鳴『記憶—我的 1957 年』書香出版社、2003年改訂版を参照。また、和輝鳴へのインタビューをまとめた玉兵監督のドキュメンタリー『鳳凰—中國の紀元』シネマグフォン（発売）、2013年。
6 譚輝雪監督のドキュメンタリー『尋找的難解』に採られている。
7 Jasper Becker, Hungry ghosts: China's secret famine. Holt Paperbacks, 1998 （ジャスパー・ベッカー『飢鬼（ハンギー・ゴースト）：秘密にされた毛沢東中国の飢餓』川勝幸美訳、中央公論新社、2012年。）
「私に対して刺激が大きかったのは、私がやっかいになった家族のことだ。子供たちは出ていて老夫婦が泣いていた。ある時、急に泣き声をして、見に行くと隣部さんが死んでいた。彼とまっすぐのために違った。彼はいつも私に頼んでくれ、気をつけなさいなと言われていた。だからその時、私は彼が亡くなったのを見て、奥さんもひどく泣いていて、強烈に打ちのめされた。当時は共同食堂での食事で、彼は食べ物を持ち帰って、なるべく奥さんに分けていた。だから自分の分が少なくなかった。そうして栄養不足になったのだ。はっきりわかった。これは飢死だっ」と。

当初は、飢死者が出るのは、自分たちの地域の現象だと考えていた。それゆえ行政や党中央は飢死者が出ていることを認識していないと思われた。向承鏡は次のように述べている。

「武山駅から村まで5キロをこの鉄道沿いに歩いた。行く先で土手に死人がころがっていった。私は非常に驚いて、村に戻ると、党中央に申し上げた。現場のこうした状況を伝えようと思ったのだ。しかし考えてみると、新聞では大躍進の情勢がますます好調だと言われていたから、私のようながたの人が、どんなことを言ったとしても誰が信じるものか。政策への中傷だと思われる。だから書いては捨て、死人を見てまた書いた。党中央に申し上げよう。毛沢東に伝えようという気持ちは変わらなかった。」

行政は食糧の配給を少なくせずに、飢餓を救おうともせず、さらに農民の食糧を搾取した。向承鏡は次のように述べている。

「当時、倉庫に食糧がなかったわけではない。なぜ動かせなかったのか。農民の飢死は爆発的に広がっていたのに、上層部は見ても目に入らなかったのだ。上層部は、農民には食べ物がある、農民は飢餓を隱していると言葉続けた。1959年末には、地面を掘り返した。農家の家宅査査をして、何十年も何代も使った枕を破って、藤草をこぎみたない枕の中身を検査、そこら中に入っていたのだ。地面には穴を掘り、オーデルにも穴をつけたが、食べ物なんて少しも出してこない。幹部たちは、ホントは農家に食糧はない知っていたんだ。そういう話は、各部署で隠して上層部には伝わらなかった。」

上層部が農民の飢死を放置したのは、幹部の自己中心的な出世欲と虚栄心による腐敗があるとともに、毛沢東の政策に対して覇気を生じさせた場合、自分の出世や安定に危機が生じるという恐怖があった。向承鏡は次のように述べている。
「59年秋には既に極めてひどい貪欲の現象が発生していた。武山県の第1書記は張仲良といい、第2書記は張克仁といわれるが、彼らは何故か相当ひどかったのに、武山の新寺公社で食品展示会を開いた」

地方党幹部は、みずからの出世と保身のために農民を犠牲にし、顕死者が出ていることを公開にさせないためには手段を選ばなかった。「星火」のメンバーで、名誉回復後に蘭州大学教授となった江献国は、本作のインタビューで次のように述べている。

「当時、甘粛省では張仲良から命令が下った。凡そ北京への手紙、つまり国務省・党中央・毛主席あとの手紙は、一律すべて検閲せよ。手紙内で顕死者だとか読めるものがいないと言及していたら、その手紙を書いていた者を投獄せよ。噂では1000人以上が投獄されたという」

この張仲良について、向承閥はこう述べている。

「張仲良というのは甘粛省の第一書記だ。彭德懷を批判した第八回八中全会で、中央委員候補は最後尾まで昇った。最後尾の中央委員候補だ。たきり覚えている。出世したんだ」

その結果、甘粛省では農民暴動が発生し、公安が実力行使をして、死傷者が多数出た。

「武山から西へ龍西と武山の間に、難所といわれる所がある。ここでいわゆる農民暴動が起こった。どういう暴動かというと、倉庫を襲って食糧を盗ったんだ。ドヤドヤとやったが、パンパンパンと何人も撃ち殺された」

このような事件における具体的な被害者やその数、死傷者が出た直接の責任、死傷者とその家族に対する保障の有無などは、本作では言及されていない。

そして、このような状況が甘粛一省だけではないという認識は、それほど早くから得られたわけではないようである。向承閥は次のように述べている。

「1959年10月に機会があって、出張することになった。北京に菌種を買いに行ったのだ。帰りに天津・保定・石家荘・邯鄲・鄭州・風陵渡などにまわって途中下車した。西安でも降りてみた。駅は各地の窓口だ。逃散した者・親戚に頼る者・食糧を探す者・子連れの者、こういう人がばかりだった。これは、甘粛一省の問題ではないのだ。それで私はこういう結
論に至った。焦死者は全く政策がもたらしたもので、中央中央・毛沢東がもたらしたものだ。そういった結論に至った。多くの地方の智のことを知った。広東・広西・雲南・貴州だ。四川だけはわからなかったが、安徽・河南は甘露と同じくひどかった。太原で兄と議論になった。地方の状況を兄に話した。兄は私が事を起こさないかと心配し、こう言った。太原を見てみろ、ビルが建っているだろう。党の指導でこんな偉大な成果をたた。おまえにはそれが見えないのかと。兄に言った。僕の目を見てよ、目は光っているですよ？兄さんが見える物は僕も見える。でも僕に見える物は兄さんには見えない。それが僕たちの違いだと。太原から戻った時にはもう、真理に殉じようと腹に決めていた。それしかないと決めていたんだ。

この話によると、向承闇の兄は太原に居住しており、農村の焦死者現象について全く認識していなかったことがわかる。そして向承闇は、大飢饉が全国レベルのものだという認識を得たからこそ、その原因が党中央の政策にあり、毛沢東にあると確信するに至ったわけである。

「星火」印刷の目的

「星火」の印刷はリスクが高いということは認識されていたようである。彼らは印刷について、当時、鳴放で民主を叫んだ北京大学の運動に関わった林昭に相談したようである。これについて譚燁雪はこう述べている。

「林昭は初め「星火」の刊行に賛成ではなかった。それは2つの理由があった。まず、秘密でこれを印刷すると、執筆者と印刷者に危険なだけでなく、読者にも同じく危険だ。それでも1つ、これを印刷した後、人に何を与えられるのか？こんなリスクを払う価値があるのか？誰もが知っている話を書くなら、おそらく書くかもしれない。しかし、林昭はこうも言った。考えを交換して、影響をひろげて団結しあうために、特に、分散して自由に行動できない状況では、「星火」は啓蒙に欠くべきであるんだ、と。」

「星火」のメンバーもこのような考えを共有したらしく、譚燁雪はこう述べている。

「「星火」を本格的に話し合ったのは、北道府旅館だった。あれが正式な会議だった。張春元・亀田・胡啓恩・苗慶久、孫和がいたかも覚えていない。彼らはそこで数か正式に話し合った。まず刊行物を出すべきか、当時、みんなの意見は同じで、出すべきだった。刊行物は意見交換と認識の統一という作用が目的だった。だから必要性が非常に高いと思った。定
期か不定期かは、とりあげず不定期で様子を見る。この会議は重要な第一歩だった。しかも決定的な第一歩だ。会議が終わってから、各自執筆に入った。張春元はもっとに腹案があった。散会後、張春元・胡曉楓・顧顯は別々に執筆しはじめた。

つまり、彼らは目前の大飢餓と飢死者の状況がなぜ生じているのか、その原因となっている政策の問題点はどこにあるのかを探索するために、各自論文を持ち寄って交換し、相互に参考にしようとしたようである。それは反右派・大躍進・人民公社といった政治運動の渦中にありながら、極めて主体的で理論的な姿勢を示しており、驚嘆に値する。

まず反右派運動について、「星火」第1号「現在の形勢と我々の任務」で向承鎬はこう指摘している。

「中国史において整風と反右派は、重大な意義がある。それは党の変質点、人民を敵とする方向への転回点、ヒューマニズムを敵とする道への転回点だ。」

彼らは自身が反右派の被害者であったが、このような向承鎬の認識は、知識人として自身が受けた反右派運動の経験によるだけではない。彼らは農村・農民という立ち位置から反右派運動を再解釈している。「星火」第1号「農民と農奴と奴隷」で張春元はこう指摘している。

「いま農村でいわゆる反右派運動が進んでいるが、これは農民に同情した者を痛めつけるものだ。やられるのは現場の基層幹部である。彼らは農民家庭出身か、自身が農民で、農民と親和的な関係にあり、多くは農村の党員である。」

農村・農民の立ち位置から見たとき、農村における反右派運動は、農民大衆の主体性を挫き、人民公社の導入の地ならしになったという認識が得られた。向承鎬は「現在の形勢と我々の任務」でこう指摘する。

「反右派運動後の「反浪費反保守」「交心」「抜白旗」などの諸政治運動は、全て反右派の続きである。こうした諸運動は、全国の人々の精神を徹底的に変革した。人民公社運動は、整風・反右派の必然的産物である。統治者は人民をならし服従させようと、人々の物質的・精神的全てに対して徹底的な剥奪をした。人民を付き従わせようとして、軍事組織的な形によって農民を編成し、奴隷式の集団労働を実行した。」
「反共産派反保守」は1958年2月に始まった、共産派の「主要思想」を告発する運動である。「主要思想」は、自身の思想の非社会主義的側面を告発する運動で、1958年3月から7月にかけて起こされた。変革思想としては新たな技術革新を出すよう求めた運動である。これらによって、農村には新たな階級が登場する事がようになった。「星火」第1号「農民と農奴と奴隷」での張春元はこう指摘する。

「いま農村の大きな変化の一つは、農民の貧困と破壊である。農村には新しい階級が出現している一農村プロレタリアである。この階層の出現は、現在の統治者を実行した極めて反動的な政党の農業政策とその結果である。まず、農業集団化というスローガンの下、残念にも農民の生産力を、まあ土地・家畜・農具などを間接的に制限し、穀物や油や絹など農民の生産所得に対して、あらゆる手で脅威を加える。特に公社化以後、農民のプロレタリア化が大きく加速された。このいわゆる「共産主義への橋」の後背で、広い範囲の農民を国家の奴隷・農奴にさせたのである。」

これは共産党の独裁の発展が、主観性と迷信によって悪しき方向に変質したためである。「現在の形勢と我々の任務」でこう指摘する。

「現在の統治者は何回かの運動において、一つの基本的な指導思想と方法を持っている。主観的恣意を事実に優先させることと法制がないことだ。それは罪なき人々の心と肉体に大きな傷を与え、計り知れない命を奪い去る死刑に変えた。国家権力と思想的指導によるのは、実は党の絶対的指導の悪しき発展である。真のマルクス主義という看板を掲げたある人物および少数の政治家たちの思想と方法は、日増しに主観的迷信と反動へと変質し、もはや悲しむべき結果を招いた」

このように目前の大飢饉と飢死者の状況の原因を考察し、それにてメンバーで意見交換しようとしたという。しかし、「星火」の内容にはそれ以外にも、飢死現象についての言及がある。これは、楊德縉の書物はかが出版されて、大飢饉の具体的な状況が報告されている現状においては、すでによく知られている事柄であるが、当時においてこの現象を認識したことは重要であり、その勇気は称賛に値する。例えば、「星火」第2号「ある歌から」で楊賢勇はこう指摘している。

※ 田春儀「五星運動と反右運動弁析」『中南大学学報（社会科学版）』第18巻第2期、2012年4月。
※ 王軍「“捕紅旗，批白旗”運動始末及評价」『歷史研究與教學』2002年第5期。
「私は見た、農民のやせ衰えた姿を、栄養失調によって水腫を発している姿を、道ばた・木の下・焼の中、至るところ死体だ。多くの家庭で食糧が欠乏し、家族全員が死滅した。毎年、政府の公報は、食糧の大躍進・大増産・大豊作、生活は大改善と言う。これはホントなのか？」

向承鑓は「星火」で「食母記」という文を書き、実際に起こった食人事件を記録・紹介しようとしたという。

「私も「母親を食べるの記」を書いてあった。事実にもとづいて書いたんだ。ある子供が母親を食べてしまった。1日に少しずつ食べて、頭部だけが残り、子供は逃亡した。後に捕まって処刑されてしまった。この事件にもとづいて書いたんだ」

こうした醜死象徴の記録は、甘粛省の農村の現場で起こっていることを広く知らせる、そして党上層部の有為の人士に伝えたいという希望がこめられていたのであろう。苗巻久はインタビューでこう語っている。

「それは私たちがこの国に見た事実だった。それが、ソ連の借金返済のせいかにされていた。自然災害だとも言われた。百円に一両の災害だと言うが、実は人災だったのだ。全ての地方幹部がウソを言って人々を騙していた。私たちが書いた人民公社のこと、彭徳懷は正しいということ、全て農村の事実に基づいて書いた。皆に真相を知ってもらうためだった。」

向承鑓の「全国の人民に告げる手紙」にもそれが濃厚に表れている。

「全国の兄弟姊妹・同胞のみなさん、みなさん見たことでしょう。山にも野にも、大通りにも路地にも町も中に戸口にも、ボロボロ衣装で食糧が無く張り目玉を飛び出して、口をあけた老若男女の無残な姿を、すでにそれを目にしてきた我々は、全てがわからいました。これは中国の歴史で、そして世界の歴史でもかつてなかった、人間性に対する冒険である。2億人が飢えて死にそうな時に、人民のために誠心誠意服務するはずの農民どもは、商店の裏でいかなる物品でも手に入れることができる。お菓子でも鶏でもタバコでも、いつでも盛大な宴会を開ける。宴会では5000人の農民が働いた物を消費するのだ。要するに、彼らは変身した。骨の髄まで変わり果てた。1957年以降、官僚統治グループを形成したのだ。彼らは人民にとって巨怪となったのだ。」
それゆえ、「星火」は当初から人々に共産党の専制への反対を呼びかける側面を持つことになった。「星火」発刊の言葉「幻想を捨てて戦いに備えよ」で顧問はこう書いていた。

「目覚めの時だ。もし君が将来の幸せのためにベルトを締め直したのなら、もし君が全人民の豊かさのために戦ったのなら、もし君が仕事を見逃さずに励んだのなら、今日この日こそ目覚めるべきだ。ベルトを締め直した結果は、食糧のさらなる減少、日々の戦いの結果は、社会全体の緊張、仕事に励んだ結果は、冷酷非情な闘争と打撃。なぜかっては進歩的だった共産党が執政十年足らずで、かくも腐敗・反動に変わり果てたのか。それは、偶像崇拝で民主を圧迫したからであり、中央集権のファシズム統治を形成した結果である。指導者の思い上がりと馬鹿なせいで、ひたすら逆行した結果である。このような独裁統治にしてまだ社会主義といえるのなら、独裁専制の国家社会主義に他ならず、ナチスの国家社会主義と同類に属する。いま全人民は厳しい任務に直面している。反右派の高潮に続いて、1957年より大きなうねりが来ようとしている。すでに目覚めた同志たちは、民主社会主義と科学的民主主義という共同の目標のもと、問題を変化させず大衆を覚醒させ、目の強権を徹底的に粉碎すべく奮闘させるであろう。」

そして、当初からリスクが高いことを承知していた彼らではあったが、餓死現象の全国的な展開やその背後の幹部の腐敗、政治的な原因などを認識すればするほど、現実的な改善のためにみずからを捨て石にする覚悟を固めていたようである。譚壽雪のインタビューによると、リーダー格の張春元は、当初に林昭と話したのとは違って、「星火」を公開することを決意したようである。

「後に張春元が提案した。当局の上層部に印刷・配布すべきだと。北京・上海・広州・武漢、それに西安の5都市があがった。」

この企画を実現しないうちにメンバーは逮捕されたのであった。この状況では、農民暴動がじょうじょに拡大する、国家的な危機的状況であることを彼らは認識していた。その改善には、幹部や範囲に現実の状況を知らせ、政策の誤りであることを認識させて、政権を作り出すしかないと考えたようである。彼らは最後まで、幹部・党員には少なくとも民主的な人がいることを、彼らが自覚の役を果たしていること、それによって共産党が民主的な方向に変わりうることを信じていたのである。向承存は、裁判で次のように発言したことが、その場の人々に影響を与えただと述べている。
「私の周囲を、武器は持っていないが、6・7人の中強な男が囲んでいた。武装警察が弓矢にずらり並んでいたが、私はしゃべっているうちに激昂し、立ち上がって途中を指さして脅倒した。『お前らそれでも人間か？農村の状況を知っているか？眼も見えるし耳も聞こえるだろう。たとえ眼が見えず耳が聞こえないとしても、鼻があれば、どこかそこに死臭があるのはわかるだろう。少しでも人間性があれば、たまらないはずだ。お前ら人間か？いや違う。お前ら人は共産党員でないだけでなく、人ではない。畜生以下だ』。罵倒するにつれてさらに激昂した。裁判は私にとって戦場と同じだった。思いの丈を全てしゃべった。まったく、はばかる物なし。本当に何の遠慮もなかった。そうした時を。自分、の声は嘘偽りはない。真実だと。時には彼らの心も動いた。その影響はかなりだったと思う。」

胡傑監督と「星火」—まとめにかえて

前述のように、「星火事件」は現場を除いて、中国ではほとんど知られていなかったのに、これを胡傑監督はどうして扱うことになったのであろうか。胡傑監督は、前作『尋找林兆的靈魂（林昭的魂を探して）』（1999〜2005年）において、北京大学学生で、1957年の反右派運動で右派分子とされた林昭の事跡を追った。この時、湯輝雪や顧瑞雪に対してインタビューをしている。胡傑監督は、林昭についてドキュメンタリーを撮り始めたことによって、中国現代史に関心を持ち始めたと述べている10。したがって、林昭について調査を進めるプロセスで、彼女と密接な関係にあった「星火」を認識し、このメンバーを取材したのだろう。林昭と「星火」の関係は、林昭に対する『上海市静安区人民检察院起訴書』（1965年7月）にも言及されている。「星火」が学生や一般の青年によって書かれた、しかも現実に対して強烈かつ鋭い批判と指摘をしているのが明確に示され、林昭はコメントしている11。

2010年、湯輝雪が自伝を発表したが、この本は普及していない12。胡傑監督は、さらに独自の調査とインタビューを重ねて、この事件のドキュメンタリー化を果たした。本作によって、彼の歴史には採り上げられなかった事件について考察する端緒が提供されたと言える。

※本編は平成26年度専修大学研究助成「アジアにおけるドキュメンタリーの可能性」の研究成果の一部である。

10 土屋昌男『中国の「民間ドキュメンタリー」とはなにか—胡傑監督へのインタビュー』『専修大学社会科学研究所月報』598号、2013年4月20日。
11 『林昭文抄』（甘牧氏 2000年7月11日抄本）。宋永毅編前揭書による。
12 湯輝雪『求索—蘭州大學右派「反革命集團」紀實』香港天馬出版社、2010年。本書には『星火』登載論文の全文が紹介されているほか、尚承鍾の日記も抄出しており、資料価値が高い。